

君言室觀左右帳記

722.

Ku816



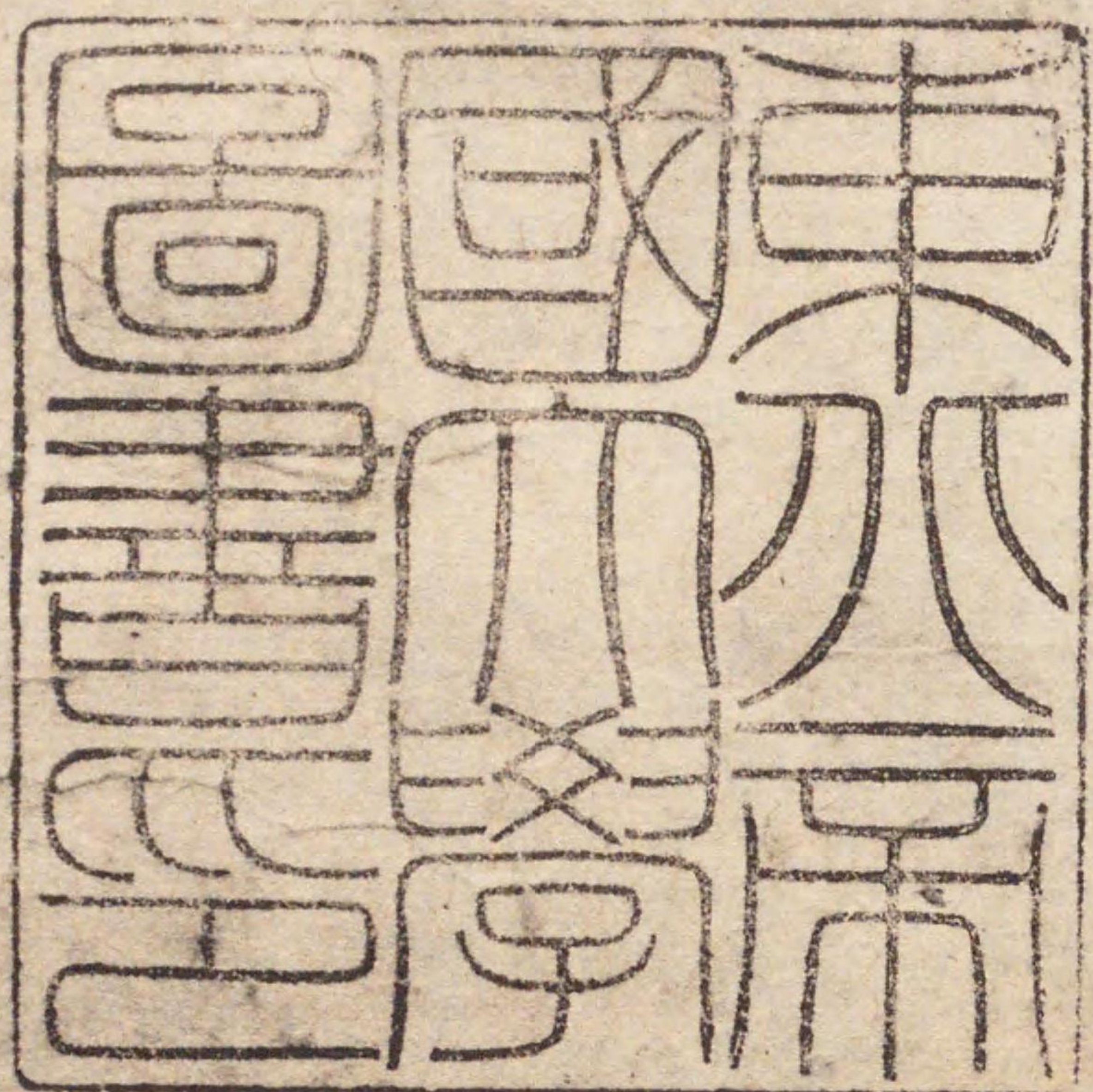
216



216513

1722. Ku 816





永祿二年古寫本
君臺觀左右帳記

東京大學圖書館
以予購入セル古寫本
狩野亭吉内蔵書

上 吳

上 曹日希興

吳吳人佛像龍長

上 顧愷之

字長康

晉陵金錫人丹青筆法造其妙

陳

上 顧野王

字希馮

吳郡人卓匠

唐

上 吳道玄

字道子

陽翟人觀音

上 王維

字摩詰

用元初人物山水

宋

上 徐宗

字人飲花乃魚也宣和殿

上 李公麟

字伯時子龍眠居士

舒城人馬長佛像羅漢山水人物

上 李成

字咸熙山水

上 郭熙

河陽温縣人善山水寒林

上 徐灏

金陵人画花木禽鱼蜂蝶蔬果

上 趙昌

字昌之 益州人善画花果折枝草虫

上 易元吉

唐之长沙人长于水禽山禽尤喜獐猿

上 趙令穰

字大年丹青之妙雪景汀渚水鸟

上 沈宗道

长安人上人物

上 張思恭

人物佛像弥陀

上 着芬

字仲石曰玉洞

宋西湖雲山諸峯雪景

宋 南渡後

上 陳容

字文舉自号长翁

温州人善画鳧松竹鹤

上 無準

字知尚 讚多 道人 人物

上 法常

号牧溪

生卒之才子竟扁担 山水樹石人物花果折枝

上 字晞古

河陽三城人善画山水人物尤工画牛

上 馬公頰

善花禽人物山水

李迪

河陽人工畫花竹石宋小景不迫

李安忠

居宣和畫院工畫花鳥三歎山水

蘇漢臣

明封人工畫尺道人物亦善嬰兒

閻次平

宋人物牛

馬遠

畫山水人物花禽

梁楷

東平相義之後善畫人物山水釋道鬼神

夏珪

字禹玉錢唐人山水人物

毛益

花鳥歎

王璠

錢唐人道釋人物宋

樓觀

錢唐人山水人物花鳥

馬麟

馬遠之子人物山水花鳥

沈安仁

錢唐人善畫魚

陳世英

道釋人物

錢選 元朝

字彙奉子

玉潭

善川人善人物山水花

鳥禽

顏輝 字秋月 江古人道釋人物山水

孫君澤 杭人善山水人物

劉耀 字耀卿 人物山水

盛懋 字子昭 善宋人物山水

子明 字山 人物山水 善馬飛龍

張月湖 或作月臺 道釋人物

西金居士 羅漢

任康民 宋人物

胡直夫 宋人物

張芳海 宋人物

王季本 人物山水

門無礙 道釋人物

柯山超然 宋人物

明招暉 鐵鏡人物 宋

中

唐

戴暉

善画牛

王维

佛像 山水 善画 物 如 佛 像 如 画

僧贯休

字德润 号禅月 大师 佛像 山水

文同

字与可 号笑笑道人 善画 墨竹

苏轼

字子瞻 眉山 东坡先生 作 墨竹

柯澄

长沙人 工画 沙佛

宋

南渡 後

赵子澄

字虞虞 善画 山水 松石 长

赵伯驹

字千里 善画 山水 松石 长

朱友仁

字无暉 无章之子 山水 烟云 林泉

杨补之

字无咎 号逃禅 老人 善画 山水 松石 水仙

莹玉

西湖 净慈寺 僧 山水

李嵩

钱唐 人 道释 人物

皇馬達

馬達之兄山水人物尤果會鳥

白良玉

錢唐人道釋鬼神

皇陸青

宋以爲國師李唐始於此

以爲一也

金

王庭筠

字子端善宋古木

元朝

楊月洞

善畫山水畫於此

皇王潤

字

若水

字澹軒

杭州山水人物尤精畫於

皇王冕

字

元章

會稽人能詩善畫梅菊竹石

張遠

字

梅岩

景亭人善畫山水人物字馬遠

皇道王翬

字

子澹

善白描道釋人物

皇王玄奘

字

皇賴庵

字

皇牽翁

字

布袋人物之類

張伯供

佛像

張芳符

号并屋右人宋人物

高然暉

山名

中空山

乃釋人物

此乃知... 如也

張冰涯

此乃鷹

戴嵩

牛

雲間徐澤

此乃山名

夏明遠

錢唐人山人物樓閣

此乃如... 如也

定山

李宗皇帝

人物如歎

陳珩

字行彤号世山果子

諭法師

此乃

檀定瑞

南揚舟

次希

字无章

山名草木松石

徐子興

山名草木松石

李亮 道釋人物鬼神
下野夫 山人物

下

韓幹 長安人 畫馬

建陽僧 惠崇 畫鷗 雁 鷗 寒汀遠渚

黃筌 字要林 成都人 山水人物 多雀 鷓鴣 水

蘇過 字仲黨 身披 先生 子 之 山水 最 錄

宋 南 後

趙孟堅 字子固 号 子 号 麻 善 水 畫 畫 白 猫 物 前 水 山 紀 介 石

廣布 字 官 作 山人 画 宋 枯 木 最 介

湯正仲 字 雅 江西 人 善 画 松 石 水 仙 南

僧月蓬 画观音 伊侏 雁溪天王

僧子温 字仲言 号日观 又号知端子

僧仁济 字澄翁 号洞之甥

陈清波 钱唐人多作西湖全景

赵子原 作小山鼓弁

僧 白湖六通寺与牧溪画意相仿

钱唐全画人物山水与马远同时笔法亦

元朝

赵孟頫 字子昂 号松雪道人 画山水人物

赵雍 字仲穆 子昂之子 山水人物

李衍 字仲虞 号息斋道人 善画

李士行 字遵道 山水竹石

朱德润 字泽民 吴郡人 山水人物

孟玉珊 共其人 画青绿山水

胡庭暉 吴真人 仿同宗

白皮用
正三
天师张嗣成号太玄善画龙

僧明
画扇栢

邱海羅
天竺寺梵僧人物道釋

李仲和
字坦然
汴人善画人物

劉履
人物古長文殊

雲淵
字不葛蒲

子庭
栗鼠用田日

松田
栗鼠用田日

錢永
後漢每為之筆法名曰

點庵
後漢每為之筆法名曰

衛陽
綠首世

孫知軍
栗鼠

楊枝
物

葉山
生漢

一卷道
人欣

迦羅蜜
梵僧像人物

姜道隱 牛

老融 牛
老融弟子牛

猪者 人物佛像

張思訓 佛像十五

陸信忠 佛像

明普悅 佛像

嘜子 觀音佛像

馮大有 蓮荷龍

李嗣 逸 仙像十五

陸仲洞 志 佛像

李万七郎 佛像

陸王三郎 佛像

美訓 佛像人物

子良

謝堂 怨齋 松竹石菊

李堯氏 小景

滕王 人物 蜂蝶

紅眉 人物

仲仁 号華光

松齋 号先子

竹齋 号筠溪

李伯仲 觀音

劉白 佛像人物

劉 人物山水

頂雲 南

李瑛 号志之

夏森 夏旌之子

張德麟 山水

夏永 山水

劉煒 山水

京都張璟 山水

仁宗皇帝 人物馬宋人

高宗 宋南渡後人 山水人物

張良布 道骨魚 畫通 山水

李士 山水人物 山水

李公茂 李安志之子

君基 畫 樓閣

咸熙 字天錫 京口人 畫山水 景木

高文進 蜀人 山水 子照 山水

周文矩 道釋人物 樓觀 山林 泉石

朱銳 河北人 山水 人物 宋南渡後人

王景辰 山水 人物

馬德南 禽獸

碧雲 人物

雲石 陸氏時中 龍 飛 畫 山水

王維 畫 山水 人物

香陽 嚴 凱 畫 詩 作 人 馬 月 山 山水

吐一びに甲一ふに二に三に四に五に六に七に八に九に十に十一に十二に十三に十四に十五に十六に十七に十八に十九に二十に二十一に二十二に二十三に二十四に二十五に二十六に二十七に二十八に二十九に三十に三十一に三十二に三十三に三十四に三十五に三十六に三十七に三十八に三十九に四十に四十一に四十二に四十三に四十四に四十五に四十六に四十七に四十八に四十九に五十に五十一に五十二に五十三に五十四に五十五に五十六に五十七に五十八に五十九に六十に六十一に六十二に六十三に六十四に六十五に六十六に六十七に六十八に六十九に七十に七十一に七十二に七十三に七十四に七十五に七十六に七十七に七十八に七十九に八十に八十一に八十二に八十三に八十四に八十五に八十六に八十七に八十八に八十九に九十に九十一に九十二に九十三に九十四に九十五に九十六に九十七に九十八に九十九に百に

一 小名横忠のころの府吏のやうにりてを
取らちるいなきをえんあのことろろろろ
ふかんのとをえりてのまじりあにちりま
わらまじりてろろろろろろろろろろろ
まじりまじりまじりまじりまじりまじり

一 四季のいざよのころのいざよふとある
岩小のいざよふとある **る** 叶中いざよふ
なるころのいざよふとある **る** 葉中いざよふ
いざよふの八幅あるいざよふとある **る** 葉中いざよふ
押板をいざよふとある **る** 葉中いざよふ



けちんふら茶櫃の架象牙ありんぼろ
 なるはあことしく花瓶のわらうやうに
 じまの

紫銅 宣旨銅の如く金一

一 生鏡物

青磁 土の如きもの物

白磁 土の如きもの物

鏡川 土の如きもの物

土の如きもの物

瑠璃 土の如きもの物

立別 土の如きもの物

土の如きもの物

白磁 土の如きもの物

土の如きもの物

一 山物

曜変 連蓋の如きもの物

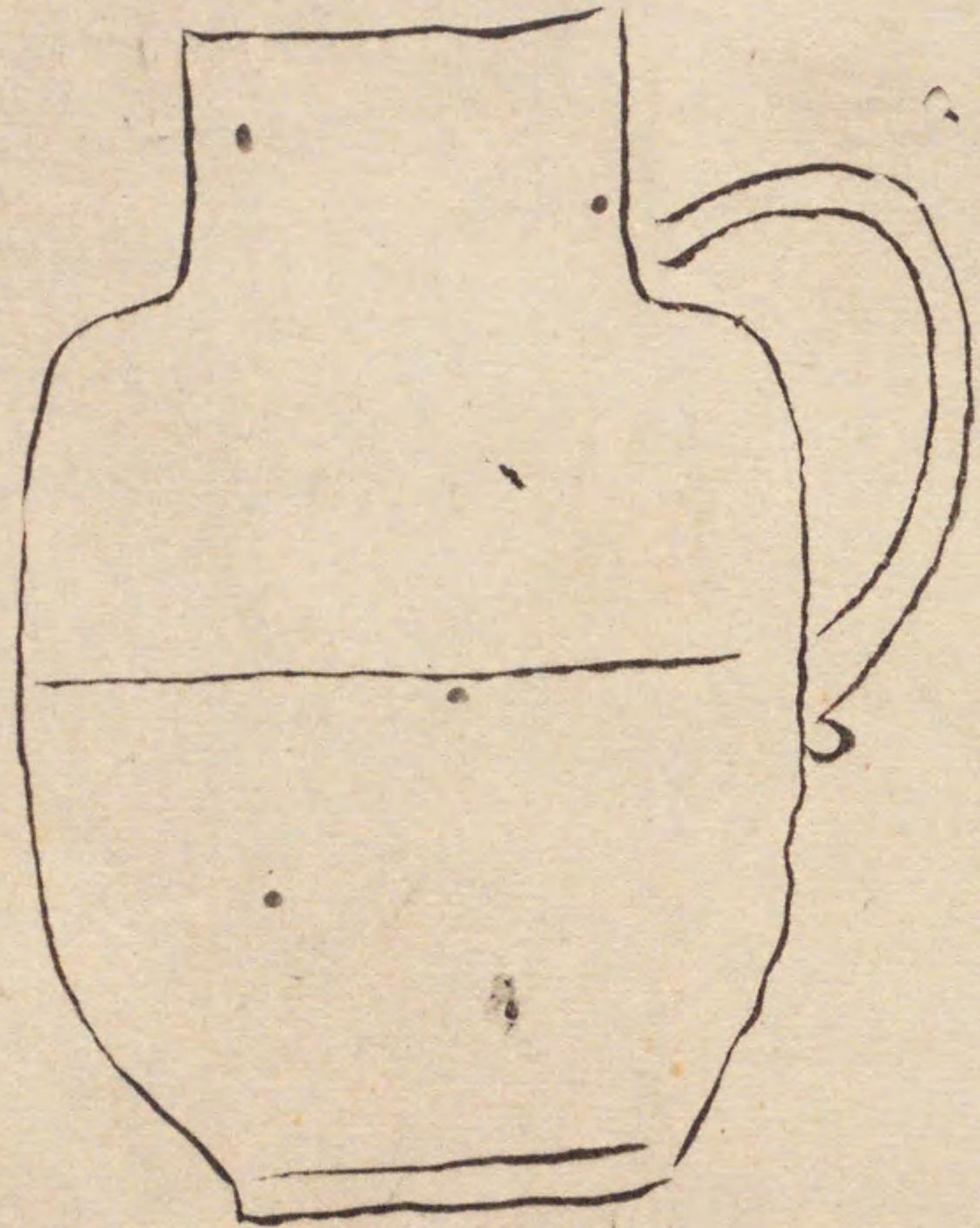
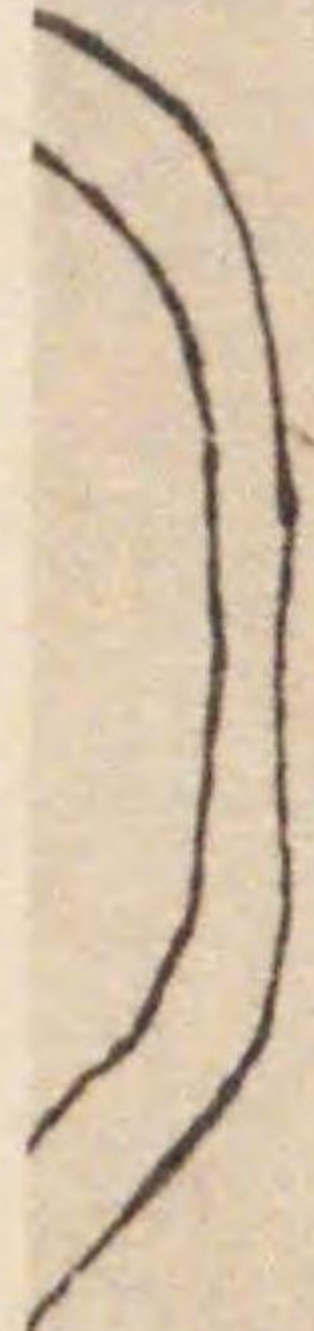
地 土の如きもの物

土の如きもの物

土の如きもの物

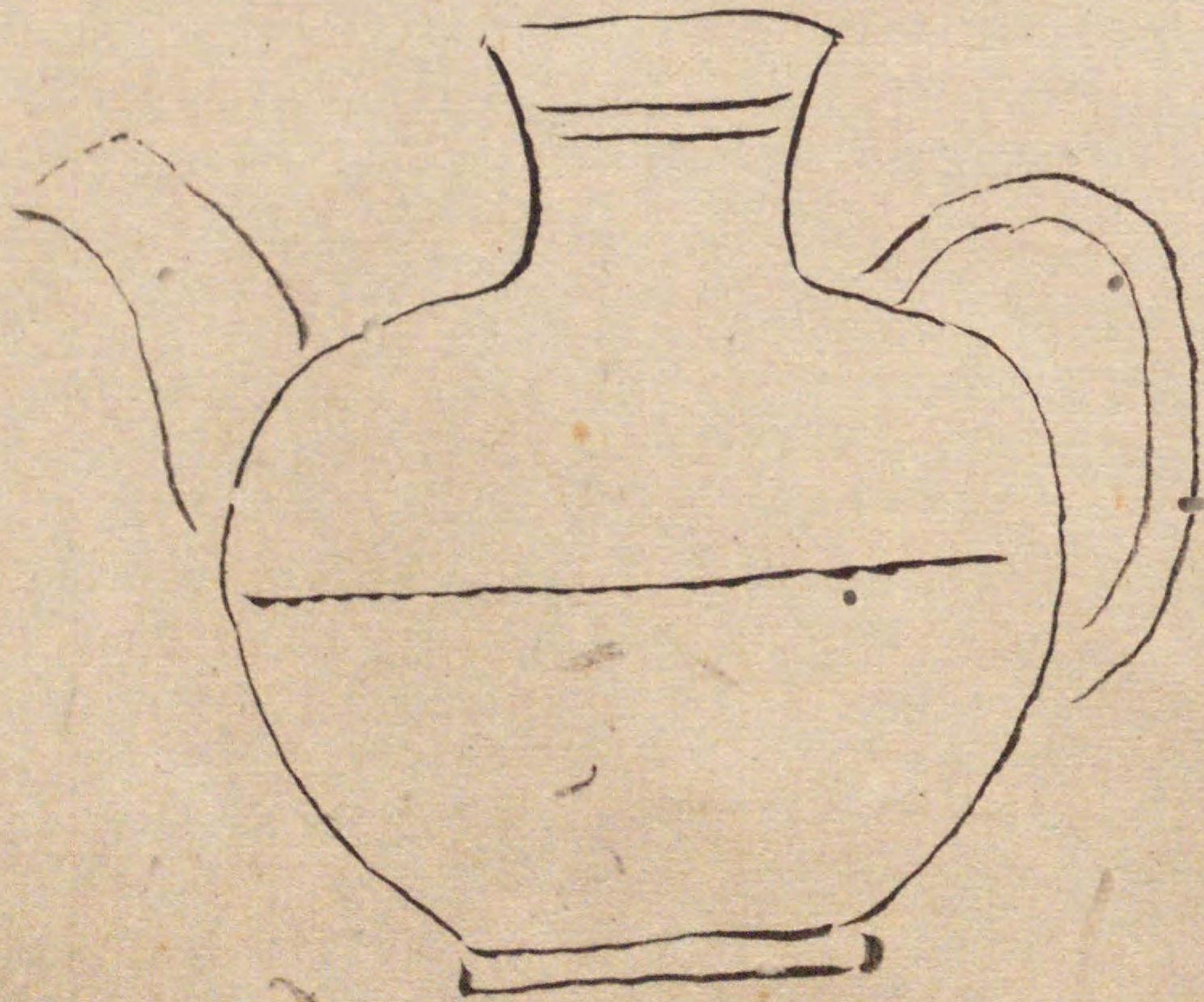
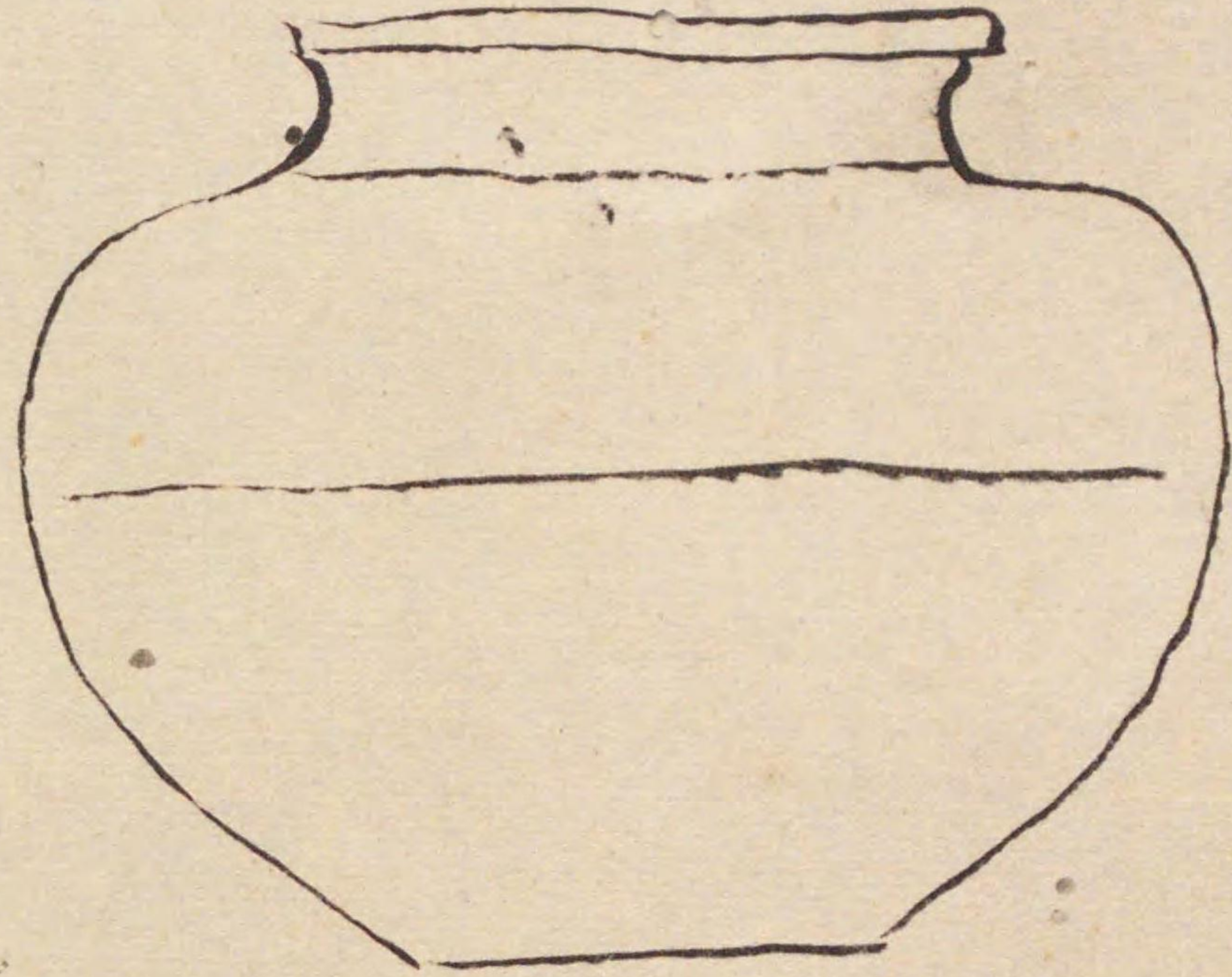
土の如きもの物

てろ



強つ^ツかす^ツてき^ツな^ツ

大海



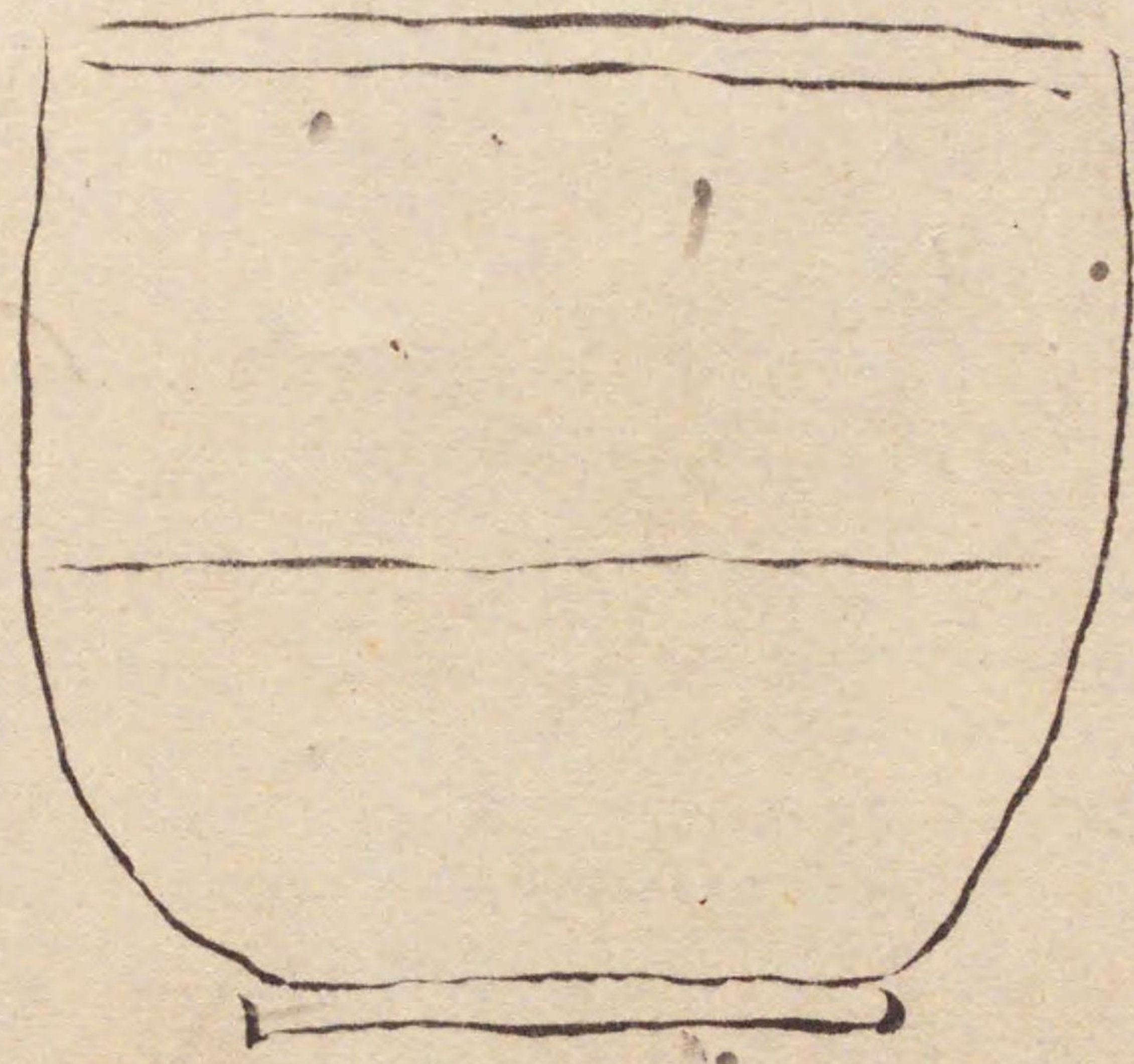
ちて^ツい^ツろ^ツの^ツ水^ツ滴^ツ

丸葉

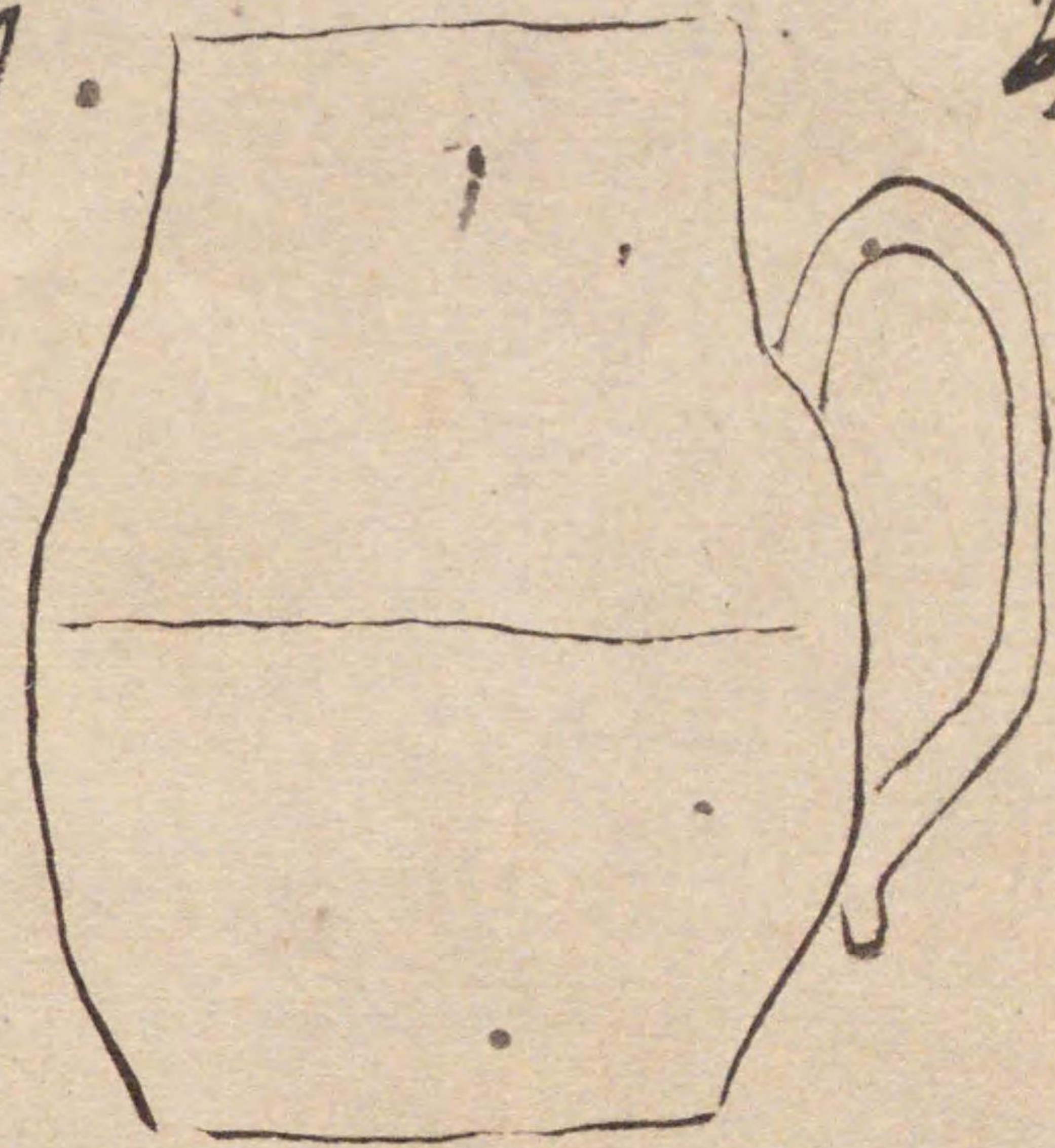




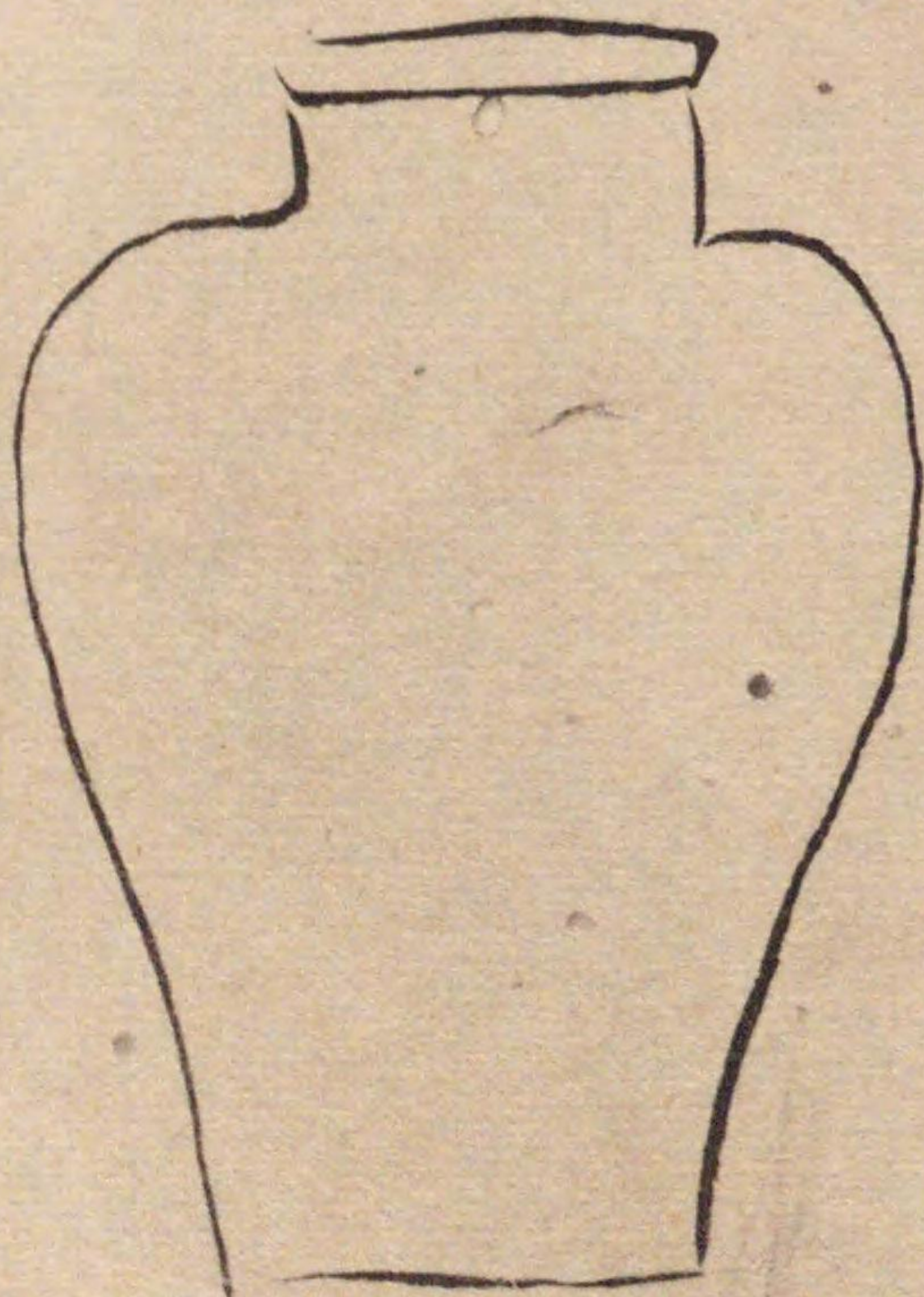
榴茶リウチャ



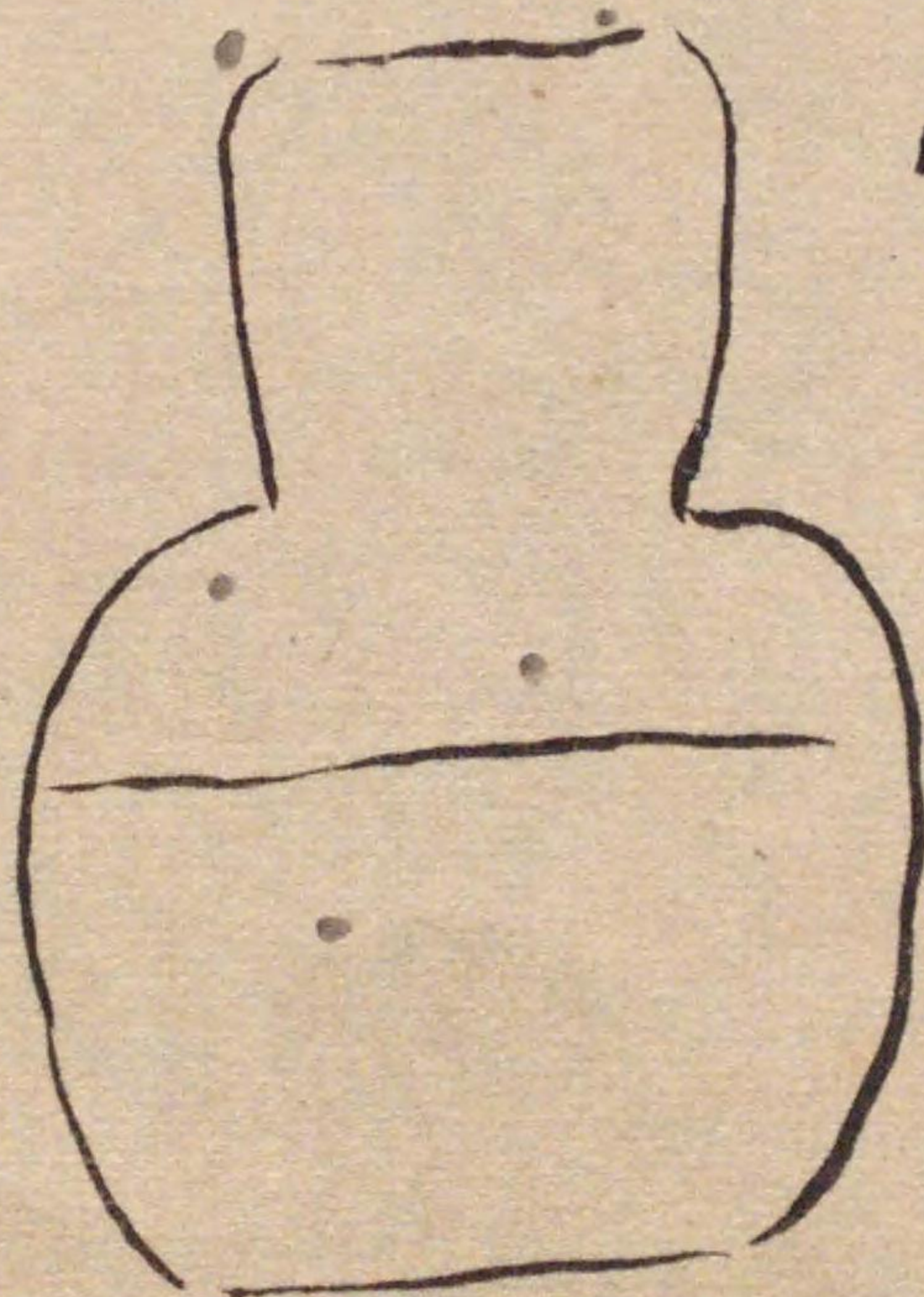
飯銅イハド



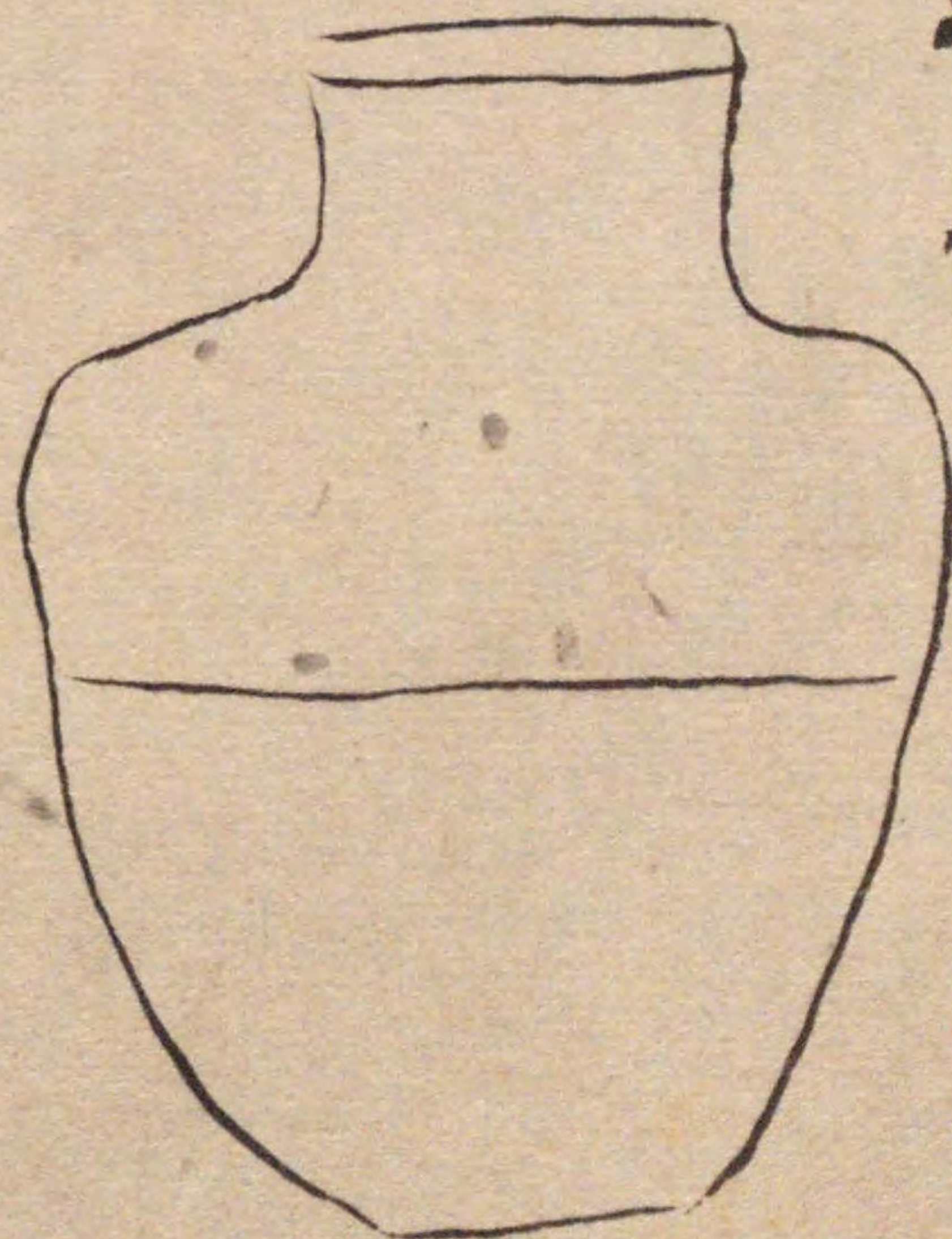
てろ



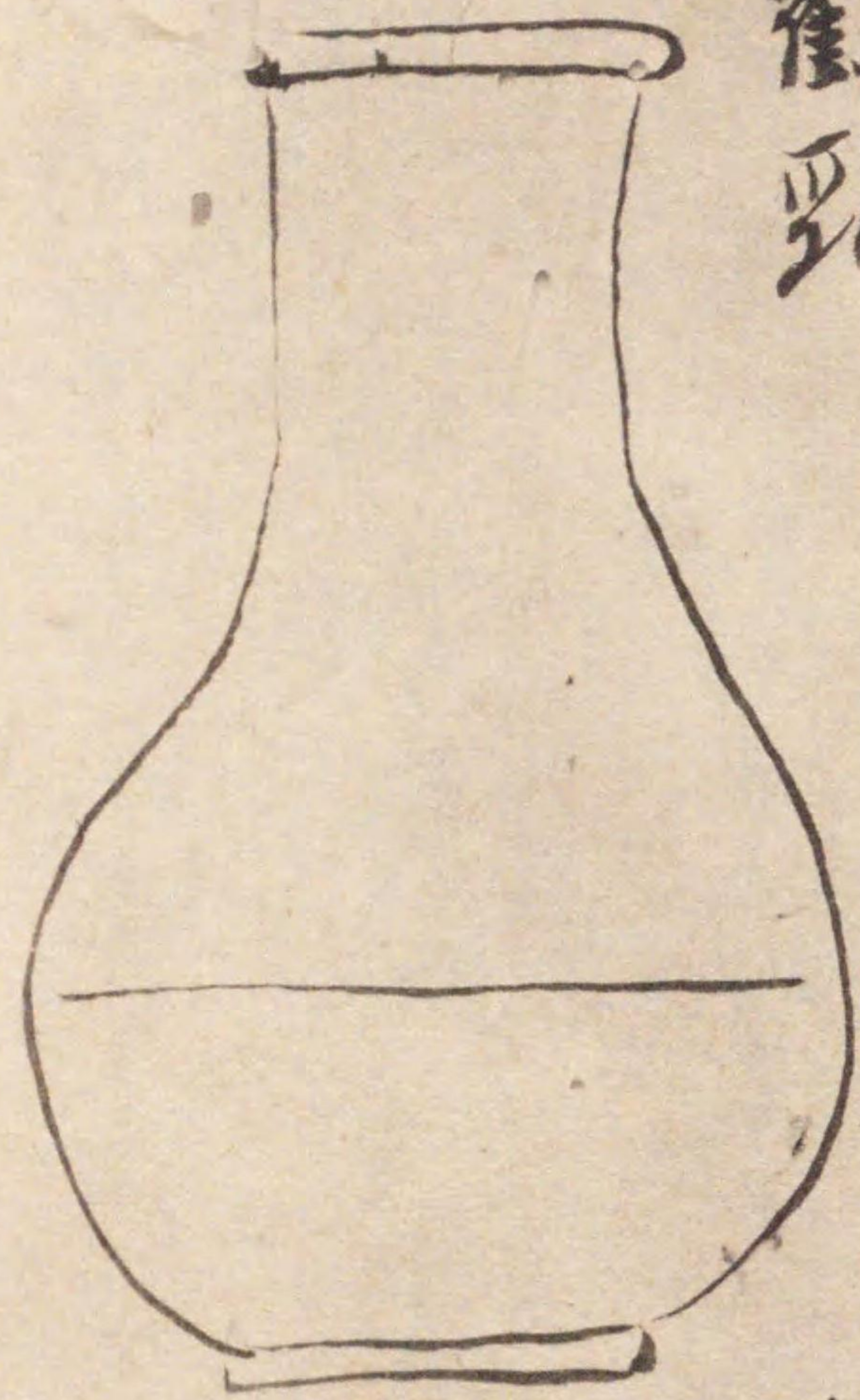
らんり



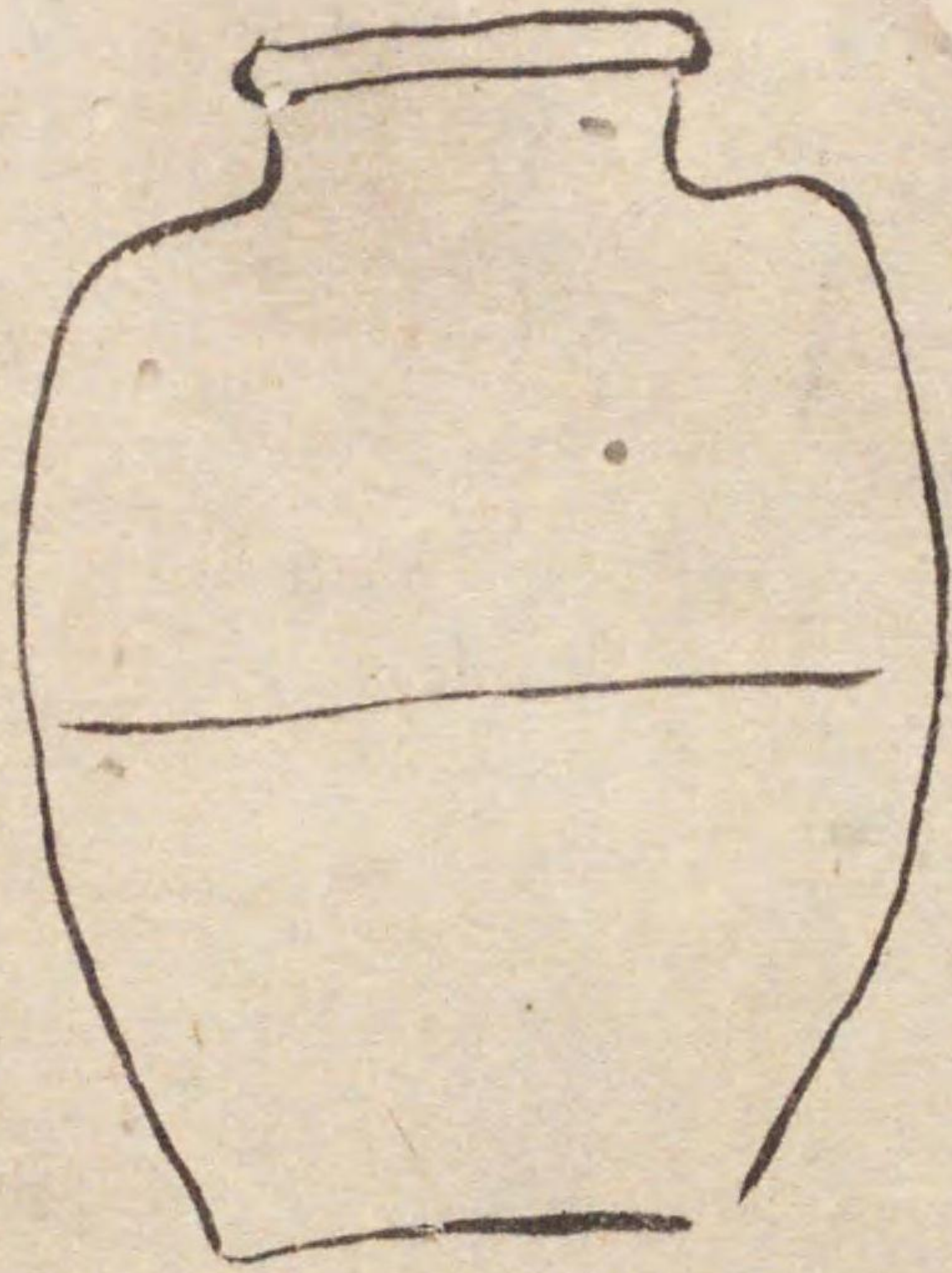
るん



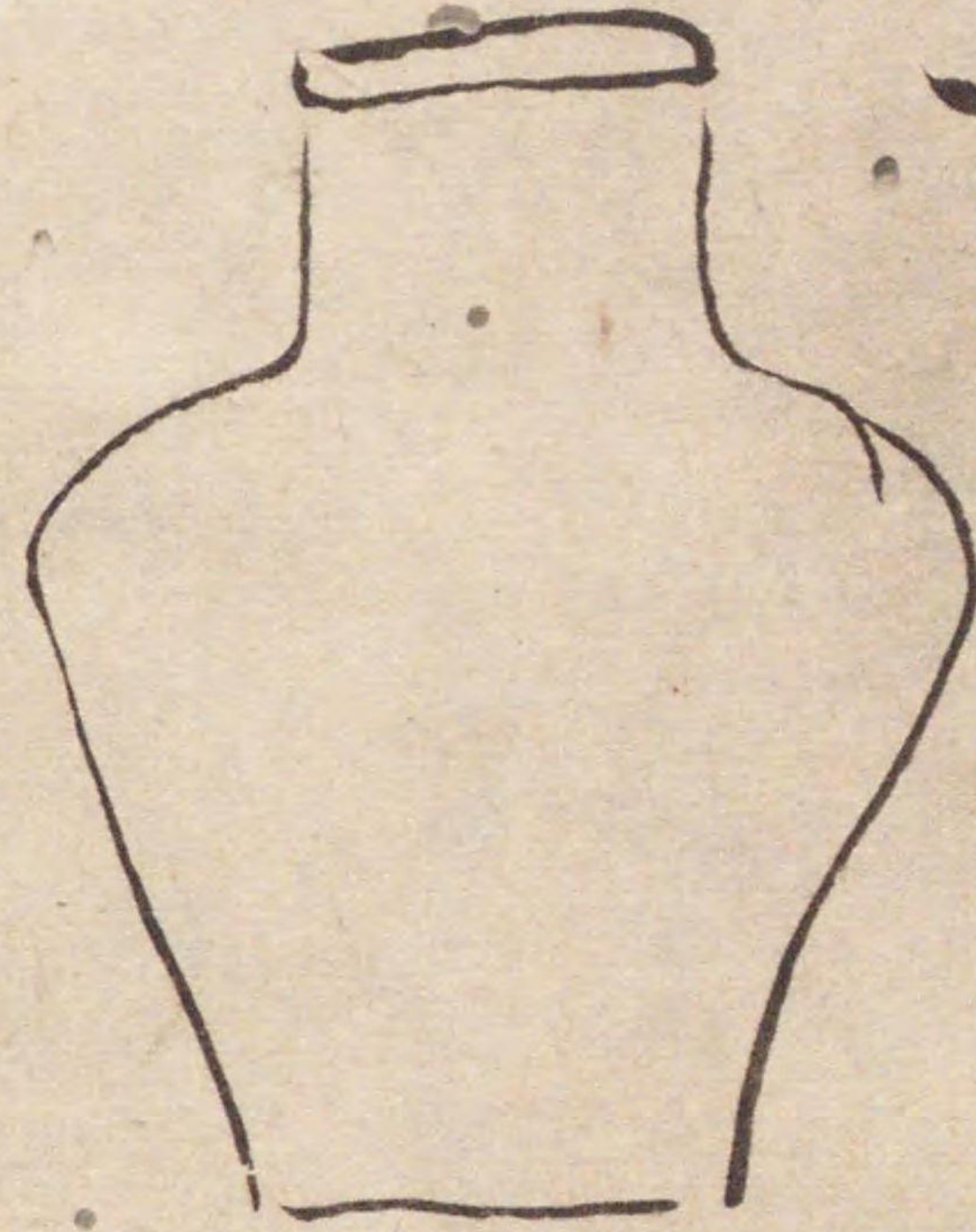
るん



鶴頭



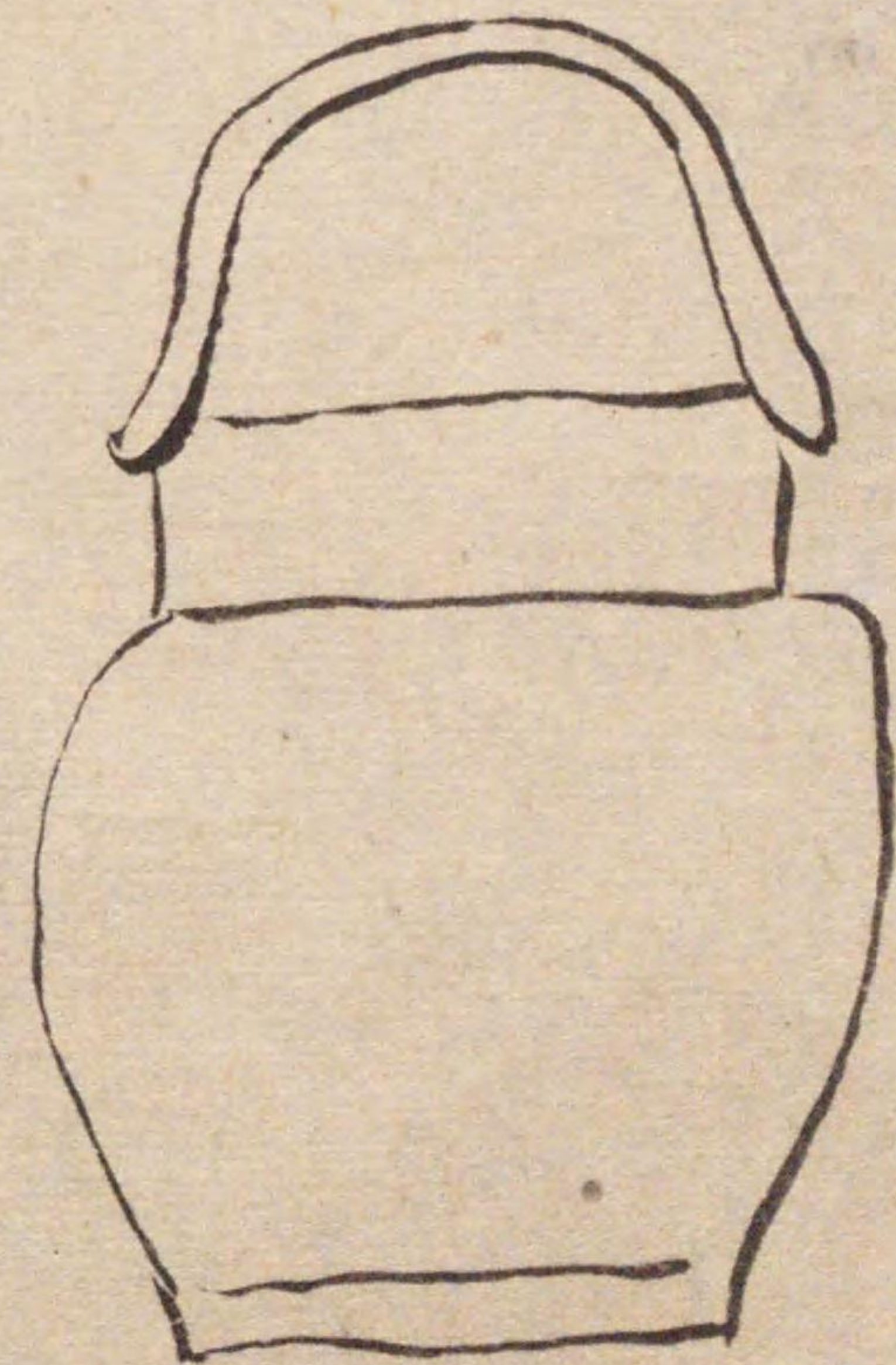
いんぎ



いんぎ



いんぎ



湯桶

一 一枚屏石屏の大方の書院より子しれ
床又、遠棚とちのたなのとちのたなをしれ

一 大方の箱の奥おくよりより又別套べつたいのたをしれ
その、墨物すみものよりより又別套べつたいのたをしれ
す、その、墨物すみものよりより又別套べつたいのたをしれ

一 喫鐘くつしょうと其玉そのたまをしれ

一 其名盤そのなばん将若盤しょうじやくばん双六盤すうろくばん右のたをしれ

一 双文すうぶん基もと紙かみ紐ひもとと玉たまとと文ぶん沈しんとと玉たま

一 此をこゝをしれ

一 象眼しょうがん入物いりものをしれ

一 七宝しちほう瑠璃るりのたをしれ

一 目め眼がんとと玉たまとと玉たまとと玉たま

一 盃さかづき首くび梁はりとと玉たまとと玉たま

一 金かね襦じゆとと玉たまとと玉たま

一 方かた色いろとと玉たまとと玉たま

ゆゑに又依り集むるをうらむ

一火鉢ハツバチ十月朔日よりをけし二月の晦

よりなるをけしハツバチ量よりするをけし火鉢を

下なるをけしハツバチはさくをけすをけし

四月迄をけしをけし

右に條々不實なるを依りて

流するをけしハツバチ不實なるをけし


永正八年辛未十月十六日

真相 

三三三

辛未年

永正八年辛未十月

流次 義継 

三三三

けし一先 流次をけし則

相何ふり年を名に
見し次写るも可和
所

ちふ六年 月 日

粉紙、白唐粉を
けちけし唐粉の
表粉、井を軸、
中、男のほき目、
一と二と

所、山、緑、二、三、五、七、九、

東北帝國大學藏 君臺觀左右帳記 解説

君臺觀左右帳記の名義は恐らくは主君の臺觀(臺も觀も高きに居て下を臨むべき建築物の名なり)に於ける左右(即ち侍者)の帳記の義なるべくして將軍足利義政の東山殿内の裝飾に關する覺書として當時同朋の一人たりし眞能の記録せしものと傳へらるゝが、今のこの本は眞能の孫眞相の手になるものなり。

この書はおのづから三部に分れ、はじめには繪畫を品第したる部分あり、次に床、書院等の飾を叙し、終に彫物、胡銅之物、茶碗物、土之物、其他器物に關する部分あり。而してその飾次第と器物に關する部分とは所々に圖を加へて、説明を助けたり。かくてこの書は骨董の鑑定に従事する者、茶湯の宗匠、其他風流好事の人々の金科玉條として古來珍重するものにして、その美術史、及び工藝史の研究資料としては今なほその價値を失はず、故今泉雄作氏の如きはかつて雜誌國華に於いて二十九冊にわたりてこれが、全文の考證をもせしほどなり。

この書はかく古來珍重せられたるがうちに、その繪畫の品第に關する部分は、ことに喧傳せられ、その部をのみとり出して或は刊本とし(正保四年の版あり)或は寫本として傳へられたるが、これらの書には本書の記事に加ふるにそれら畫人の印章を轉載せしものあり、又別にこの記中の宋人について、印章と小傳とを輯録して宋畫小品と題する刊本もあり。(文化十年の序あり)然れども、その全書は久しく寫傳せられたるに止まりしが、群書類從にこれを收めてはじめて刊行本としてこれを見るを得たり。明治十七年に到り博物館に於いて古寫本によりて模刻せしが、その本は、世に流布するもの多からず。

今、複製する所は一卷の卷子たり。卷末には木軸をつけたれど、卷頭は特別なる裝を加へず、ただ禮紙一張を附するのみ。禮紙は厚き楮紙にして、高さは初に於いて七寸七分弱、第一紙との繼目の邊七寸五分六厘、長さ八寸六分五厘ありて、その内面は八寸二分五厘を見る。その差は本文の紙との繼目として重なる部分なり。この禮紙は本文より新しく見ゆ。後に加へしものならむ。外題に記せる文字はこの書の舊藏者、文學博士狩野亨吉氏の手書なるべし。外題の右に、「東北帝國大學圖書印」の記ある朱の方印、及び「荒井泰治氏ノ寄贈金ヲ以テ購入セル云々」の旨を記したる朱の長方印あり。いづれも東北帝國大學の藏となりし後の印記たること勿論なり。

本文は薄き楮紙にして一面に裏を打てり。所々に蠹蝕あれど本文を害する程に甚しからず。紙は高さ七寸五分にして、二十一紙より成り、その各紙の長さをその繼目によりて算すれば、大多數(十三紙)は一尺四寸四分にして、その他は、

第一紙	一尺二寸
第二紙、第十四紙、第十六紙	一尺四寸三分半
第八紙	一尺三寸七分
第十二紙	一尺四寸四分半
第十九紙	一尺四寸三分
第二十一紙	一尺二寸三分

なり。その第二紙の短きは端の切れたる爲なるべく、第二十一紙の短きは末を軸に卷きたる爲ならむ。第二十一紙の最後の行の永祿の奥書の末の「之」字の左端より軸までの空白は六寸あり。

本文はすべて墨書にして内題なし。(恐らくは内題はもとありしならむが、紙端二寸餘切れたると共に失はれしならむ。されば今の本にては書名は全然明かならずといふべきなれど、他の諸本に比較してこれを知るをうべきなり。)かくて畫人の品第を記すべく、まづ、「上」と肩書して「吳」と記し、その次の行に「曹弗興」の名と説明とを記し、次下、これに准ぜり。それら人名の部には多くは片假名を以てよみ方を加へたるが、それによりて「閻次平」(エンズヒン)「顔輝」(カンヒ)「明哲暉」(ミンテツキ)などの唐音のよみ方を徵すべし。なほ他の部分は平假名交りの文なるが、物名には往々片假名を以てよみ方を加へたり。それにも「剔紅」(チッコウ)「犀皮」(セイヒ)「存せら」(ツン)「胡銅」(コトウ)などのよみ方を明かに示したるあり。

この本は巻末に

右此條々不實候へ共依所望思出次第にしるし候不可有外見候也

永正八年 未 十月十六日 真相(花押)

とありて、その花押を模寫したる左傍に「ニセハン」と記したるは原本に似せて記したる義なるべし。その次に又

辛未年

永正八年 未 十月 源次吉繼(花押)

と記し、その華押の左傍にも「ニセハン」と記せり。これはその源次吉繼といふ人が、その真相の奥書せし本を所持して自らその名を署せしものを模したるならむ。なほその次に、

此一巻源次令所持候則相阿彌自筆之本也以一見之次寫留者也可秘之

于時

大永六年十二月 圓深

とあり。これはその相阿彌自筆の本を所藏者源次より借りて圓深といふ者が大永六年に書寫せしことを告ぐるものなり。更にその次に、

料紙は白唐帗本のかさは此本だけ也唐紙のうらあと打也表紙は打疊軸は栴椰子木也紙のつき目に相阿判一々に見也

于時永祿二孟春吉日寫之

とあり。今この本の紙と書體とを以て考ふるに、この奥書を記せる永祿二年書寫の實物なること毫も疑ふべきものにあらず。この奥書は何人の加へしものか明かならねど、圓深の書寫せし本をば更に、この時に書寫せしことを告ぐるものにして、その圓深の本の料紙、大さ等を委しく告ぐるものとして、この記載は重んずべきものなり。ことにその本が、原本のつき目に加へたる相阿彌の判を一々模寫せし由なれば、圓深の寫本が原本の忠實なる模寫なりしことを想像しうべく、この寫本は、その相阿彌の繼判をば模寫せねど、それと本の大きを同じくし、又相阿彌及源次の華押を模寫せしことなどを以て推せば、これ亦頗る忠實なる模寫なりと知られたり。

今この本を群書類従本、博物館本に比較するに、本文に於いても、奥書に於いても頗る出入あるを見る。先づ群書類従本は奥書に文明八年三月十一日の能阿彌の署名ありて、大内左京大夫殿(政弘)といふ宛名あり。この點は博物館本及びこの本が永正の相阿彌の署名あると著しく異なりとす。この群書類従本は内容に於いても他二本と頗る異なるものなり。先づ、その畫人の品第の部分に於いて、人數の上につきてのみ見ても著しき差あり。その差を一覽表にすれば次の如し。

群書類従本	博物館本	東北大學本
上 五十人	四十四人	四十九人
中 三十八人	四十一人	四十一人
下 六十八人	八十七人	八十七人
計 百五十六人(内一人重複)	百六十二人	百七十七人

即ち群書類従本よりも東北大學本の多きこと二十一人たり。しかもその上中下三品の間に於いても出入あり。上品に於いて東北大學本は陸青、蘇顯祖、卒翁の三人を缺きて、顧愷之、顧野王之二人を加へ、中品に於いて東北大學本は、黃筌、胡庭暉、張德麟の三人を減じて、趙子澄、瑩玉澗、陸青、率翁、徐子興、丁野夫の六人を加へ、下品に於いて、東北大學本は關立德、關立本、李思訓、瑩玉澗、馬興祖、王庭吉、士廉、邊景昭、汝一子、阿迦々の十人を缺きて、黃筌、蘇顯祖、張德麟其の他群書類従本に見えぬ人名廿六人計二十九名を加へたり。又、座敷飾と題する部分以下はその記事の量多く事實の上にも出入少からず、その圖の如きも甚しく異なる點多くして、他の二本と同一の本として述ぶるに堪へざる程のものなり。或は能阿彌のその書が畫人の部に於いて彼の如く粗に、座敷飾及び、器物の部に於いてかくの如く密なりしを相阿彌が加減せしか否かにつきては容易に斷言しがたき所なり。ことにその座敷飾の部には真相の御飾記と趣を一にする所も少からずしてなほ研究の餘地あり。且つ又その本が、能阿彌の眞本より如何にして傳はりしかも明かならず、群書類従本の底本の如何なる本なりしかも未だ知られざる所なり。されば今姑くこれを別種のものとして見なして論及せず。

博物館本は奥書一所のみなり。これは、東北大學本にある永正八年十月十六日の真相の奥書と略同じ文にして、「しるし候」を「記也」とする差あり。千光堂松翁居士の宛名あり。この本はその原本を忠實に模刻せしものにして、その原本は一般に相阿彌自筆の本と信ぜられてあるが如し。而してその原本と思しきものを大正十四年の井上侯爵家藏品の入札目録に見る。今この博物館本及び、その井上本の寫眞を見ても、その書風は永正頃のものとは見え、それよりも頗る下れる時代のものと思えたるのみならず、真相の花押はこの本に模せるものと稍形を異にし、且つ生氣に乏しきを見る。又その本の圖を比較するに、東北大學本の圖の筆意生動せるに比して著しく萎縮せるを見れば、その圖が真相の眞筆にあらざることは論をまたざるなり。以上の如き見地に立つときは、この東北大學本は永正の原本より第三傳の本なれども、永祿の實物なることは疑なくしてその由來明確なれば、君臺觀左右帳記の現存傳本中最も信憑すべきものといふべし。

更に又本文について博物館本とこの本とを比較するに、博物館本にある誤脱を正すべき點少からず。先づ、その畫品の上の部の宋南渡後の條中李迪の次に

李安忠 蘇漢臣 閻次平 馬遠 梁楷

の五人の名あり、各それ／＼の注記ありて、次に、夏珪の名に移るに博物館本は上の五人の名は全く無くして李迪より直ちに夏珪につづけり。上の五人者の如きはいづれも著名の人にして、その畫蹟の當時賞翫せられしなることは疑ふべからざるにこれを載せざるは明かに脱落といふべきものなり。又書院飾次第のうち、最初の圖は書院飾の圖にしてその次に説明二項ありて、次に違棚に香の具等を飾りたる圖あり、次に二項の説明ありて、次に袋棚を有する圖にうつるに、博物館本には、その違棚の圖とその次の二項の説明とを脱せり。上の書院と違棚とは東求堂の茶室に存するものの略圖なるべきこと、現存の建物の實地に照して知るべく、これによりてもこの左右帳記が古來の傳記の如く、東山殿内の裝飾の記録たることを確認すべき貴重なる資料なるに、博物館本に書院の圖のみを存して、その隣の違棚の圖を逸せるは、これ亦脱落なること著しといふべし。その他少部分の異同は今一々あけざるが、東北大學本といへども誤脱なしとは保證しがたき所なれど、博物館本の誤は遙に多し。たとへば、畫品の下部の元朝の條の「天師張嗣成號太玄」とあるを「天師張」を名の如くして「嗣成號太玄」を下に注記せるが如きあり。されど一般に、東北大學本と博物館本とは眞相本として共通するものにして、眞能本たる群書類従本と比するに、種々の點に於いて、往々すぐれたる點あるを見る。群書類従本には「胡庭暉」をば中品と下品とに重出するが、眞相本には下品に入れたるのみ。群書類従本には陳青波の條下に畫史會要にある他人の名の下の注記を加へたるが爲に、その書の價值を疑はれたれど、眞相本にはこの失態なし。又顯宗皇帝の條の圖會寶鑑の文のまゝを注記して墨竹に妙を得たる由をいはずとの批難ありしなれど眞相本はいづれも明かに墨竹と記せり。或は月壺を張月湖とし、明鐵鏡を明哲暉と記し、月潭を道士蕭月潭と記し、此山を陳珩と記し、元嬰を滕王元嬰と記したるが如き、又普悅は不明なる人物とせられたれど、四明普悅と記せるにて四明天童の僧なるべきことの知らるるが如き幾多のすぐれたる點を見るなり。かくしてその眞相本に於いてはこの東北大學本が最も信をおくべきものなること既に述べたる所なり。

要するに、本書には君臺觀左右帳記の原始のままの姿を傳へたりや否や研究の餘地あるべしといへども、眞相本の實際を今に傳へたる本として、今日に於いてこれ以上のものを得べくもあらざるべきのみならず、その君臺觀左右帳記自體の研究に於いても、その研究の基礎とすべきものは現在に於いては本書を措いて他に存すべからざるなり。

昭和七年十二月廿日

山 田 孝 雄

昭和八年一月廿五日印刷
昭和八年一月廿八日發行

(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

東京市下谷區上野公園東園

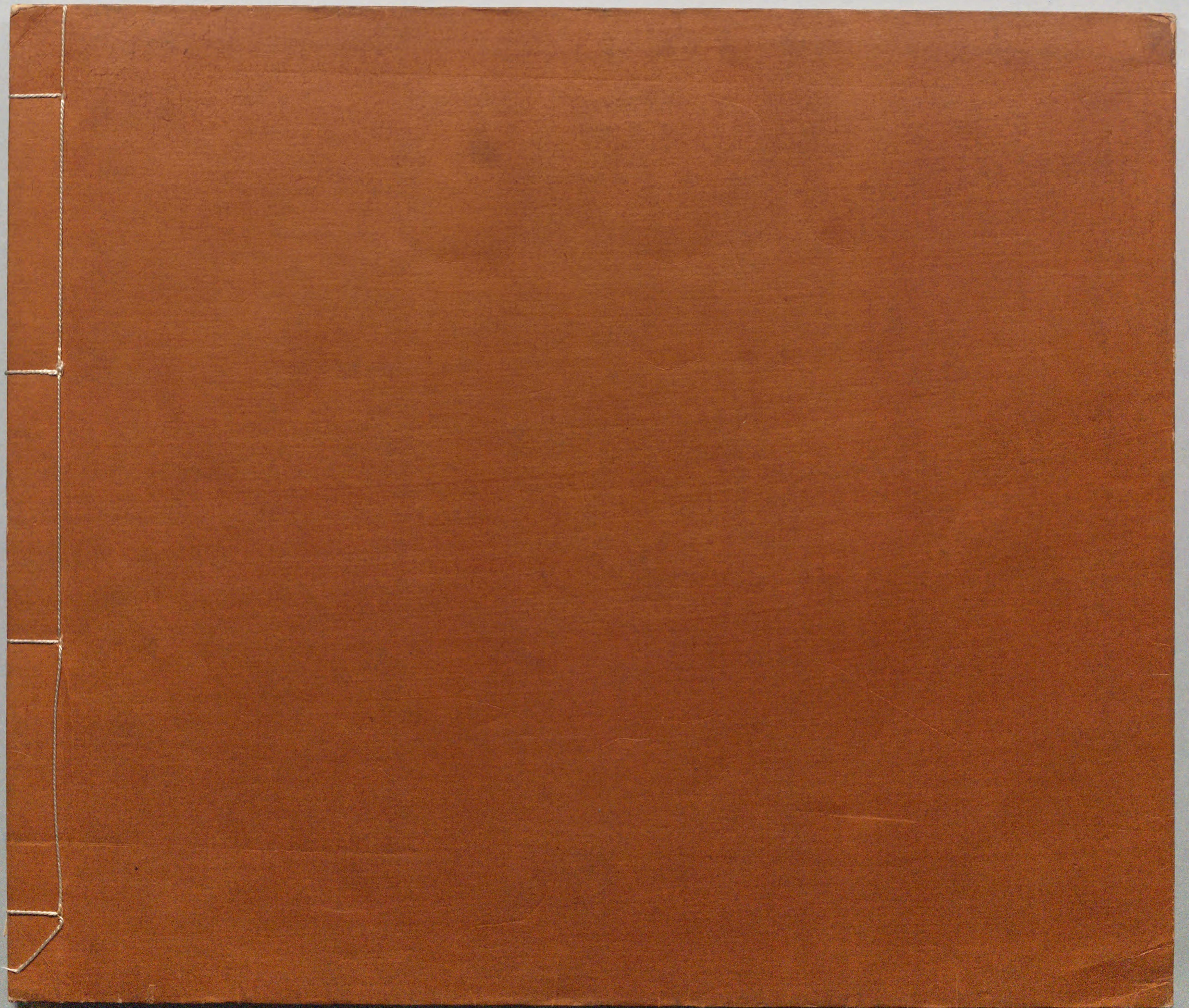
右代表者 七條 愷

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町五番地

古典保存會事務所

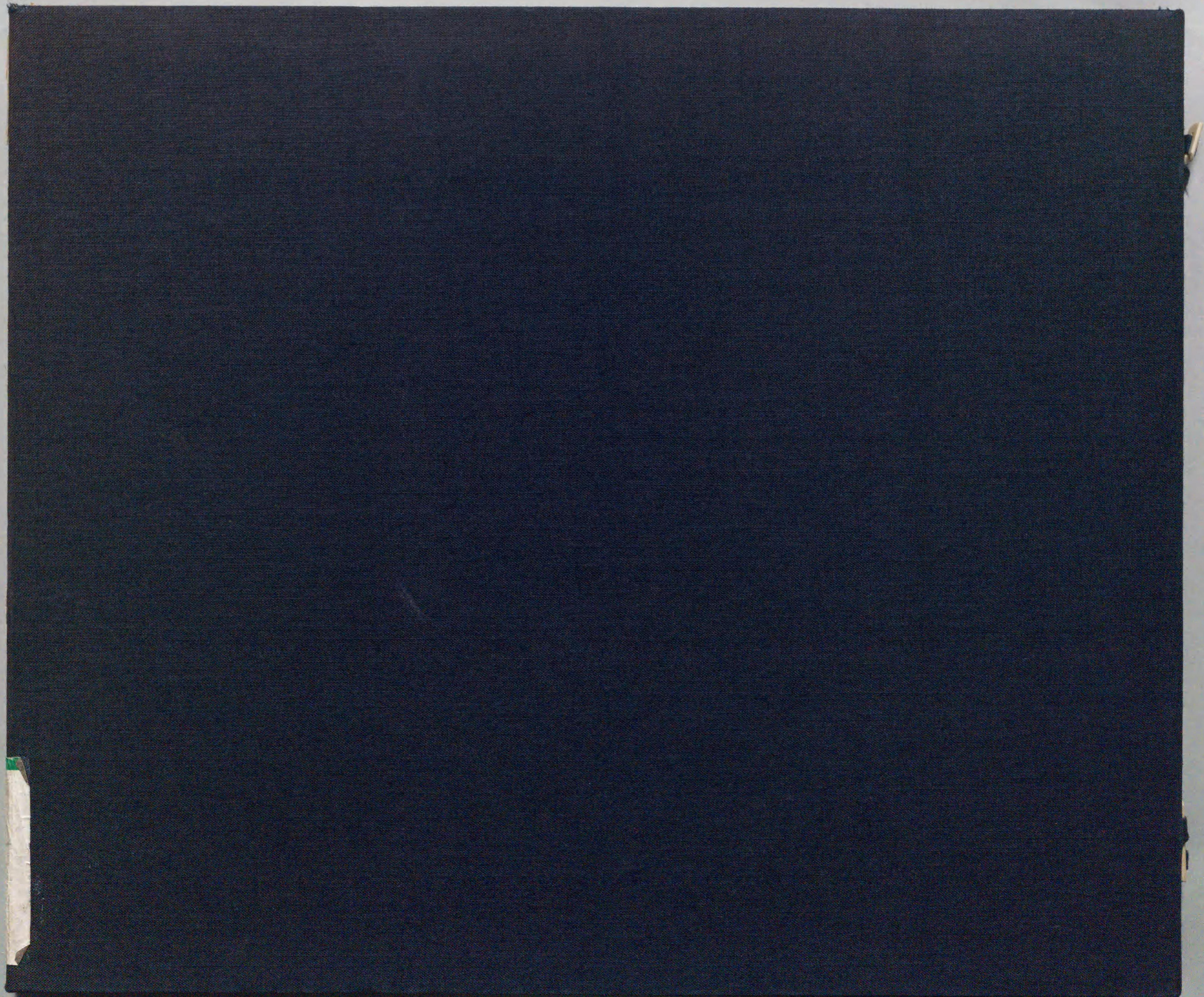
電話下谷六七八八番
振替口座東京四四九四八番



君臺觀左右帳記

722
Ku816



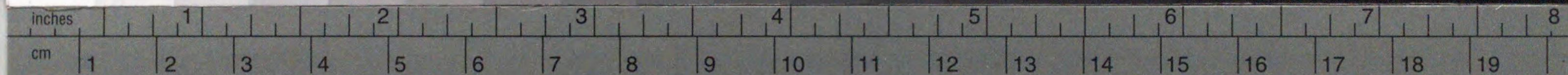


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

